

「大競争」時代の＜市場と権力＞(1)

B. アンダーソンのナショナリズム論再考 (上)

原 田 太津男
(国際関係学科 講師)

ナショナリズムが現代世界に及ぼした広範な影響力とは裏腹に、ナショナリズムについての妥当な理論となると見事なまでに貧困である (B. アンダーソン)⁽¹⁾

問題提起

B. アンダーソンによれば、ナショナリズムの理論家がしばしば突き当たり、困惑し苛立ちを覚えるようなパラドクスが3つあるという。

「第一は、歴史家の客観的な目には国民が近代的現象とみえるのに、ナショナリストの主観的な目にはそれが古い存在とみえるということである」。

「第二は、社会的文化的概念としてのナショナリティが形式的普遍性をもつ…だれもが男性または女性として特定の性に『帰属』しているように、現代世界ではだれもが特定の国民に『帰属』することができ、『帰属』すべきであり、また『帰属』することになる…のに対し、それが、具体的にはいつも、手の施しようのない固有さをもって現れ、そのため、定義上、たとえば『ギリシャ』というナショナリティは、それ独自の存在となってしまうということである」。

「第三は、ナショナリズムのもつあの『政治的』影響力の大きさに対し、それが哲学的に貧困で支離滅裂だということである。別の言い方をすれば、ナショナリズムは、他のイズムとは違って、そのホッブスも、トクヴィルも、マルクスも、ウエーバーも、いかなる大思想家も生み出さなかった」と

いうことである (Anderson [1983], 邦訳 15-6 頁)。

アンダーソンは、こうしたジレンマの原因を『『それ [ナショナリズム：引用者]』をイデオロギーのひとつとして分類する』ことの無理さに求め、「国民と国民主義は、『自由主義』や『ファシズム』の同類として扱うよりも、『親族』や『宗教』の同類として扱ったほうが話は簡単なのだ」と指摘したうえで、かの高名な定義、つまり「国民とはイメージとして心に描かれた想像の共同体である…そしてそれは、本格的に限定され、かつ主権的なものとして想像される」という定義を導き出すのである (ibid., 16-7 頁)。

このナショナリズムという問題に関しては「マルクス主義も自由主義理論とともに、ちょうどブトレマイオスの天動説がその末期にそうであったごとく、なんとか『現象をすくい上げよう』と視野狭窄に陥って」(ibid., 14 頁) おり、多くの論者は、定義をめぐる「タイポロジーの罠」から逃れることができずにいる。

例に漏れず、アンダーソン自身も「モダニスト」としてレッテルを貼られ、近代の「人造物」としてナショナリズムを理解したことが、かれの主要な論点だとされる。整理のさい、かれ独特の用語である「出版資本主義」、「クレオール・ナショナリズム」、「俗語ナショナリズム」、「公定ナショナリズム」、「遠隔地ナショナリズム」がつけ加えられることもある⁽²⁾。

アンダーソン自身はこう述べている。「ナショナリティとナショナリズムが文化的人造物であること、これを正しく理解するためには、それがいかにして歴史的な存在となったか、その意味がときとともにどのように変化してきたか、そして今日、なぜそれがかくも深く情念を揺さぶる正統性を持つのか、これを注意深く検討する必要がある」(ibid., 14 頁、下線は引用者)⁽³⁾

幾多のナショナリズム論が、暗黙のうちに前提しているか、意識的に忌避している(どちらにせよ明示的に取り上げないことに変わりがない)のは、ナショナリズムがもたらす激昂、大量殺戮、その崇高性という中心的課題である。「死(地)への動員力」といってもよい。

「今世紀の大戦の異常さは、人々が比類のない規模で殺し合ったということよりも、途方もない数の人々がみずからの命を投げ出そうとしたということにある。…

ひとがふつうみずから選んだのではない自分の国のために死ぬということ、このことは、労働党のため、アメリカ医師会のため、あるいはおそらくアムネスティ・インターナショナルのために死ぬということでは決して太刀打ちできない道義的崇高さを帯びる。それは、国と違って、これらの団体に人はたやすく参加したり脱退したりすることができるからである。革命のために死ぬということ、これも革命がなにか根本的に純粹なものと感じられればられるほど崇高さを帯びる。(かりに人々が、プロレタリアートとは冷蔵庫、休日、権力を国境を越えて追跡する集団にすぎないと想像するならば、人々は、プロレタリアートのメンバーもふくめ、どれほどそのために死のうとするだろう。)」(ibid., 247-48頁)。

だから、アンダーソンは『想像の共同体』の本論(「Ⅱ. 文化的起源」)を次のように書き出したのであった。「無名戦士の墓と碑、これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表現するものはない」(ibid., 24頁)。

かれは続けて言う、「こうした記念碑の文化的意義は、たとえば、無名マルクス主義者の墓とか自由主義戦没者の碑とかをあえて想像してみれば、さらに明らかになろう。いいしれぬ滑稽さを感じずにはおられまい。それは、マルクス主義も自由主義も死と不死にあまり関わらないからである。一方、ナショナリズムの想像力が死と不死に関わるとすれば、このことは、それが宗教的想像力と強い親和性を持っていることを示している。…仏教、キリスト教、あるいはイスラムが、数十ものさまざまな社会構成体において数千年にわたって生き続けてきたこと、このことは、これらの宗教が、病、不具、悲しみ、老い、死といった人間の苦しみの圧倒的重荷に対し、想像力に満ちた応答を行ってきたことを証明している」(ibid., 24-5頁、下線は引用者)。

これらの叙述から、アンダーソンのナショナリズム論が前提としている人間像が浮かび上がる。それは、有限な空間と時間のもとで生きとし生ける人間である。かれが「想像」という次元を繰り返し問題にするのは、(リアリティに対する意味での) ナショナリズムの「人工性」「虚偽性」「空虚さ」にかかわるというよりも、むしろそれが「人間の有限性」に発する行為であるからである。あるいは、「実際には、…日々顔付き合わせる原初的な村落より大きいすべての共同体は(そして本当はおそらく、そうした原初的な村落ですら) 想像されたもの」であり、「共同体は、その真偽によってではなく、それが想像されるスタイルによって区別される」からである(*ibid.*, 18 頁)。

本稿の狙いは、B. アンダーソンのナショナリズム論にたいする批判的検討を通じて、現代の社会組織のかかえる問題点を摘出するところにある。アンダーソンのいわゆる「想像の共同体論」にはいくつかの系論が含まれているが、本稿では、なかでもかれの資本主義論に注目してみたい。この点については後述するとして、今しばらくは、アンダーソン自身の議論の構成について検討を続けていくことにしよう。(次号に続く)

【注】

- (1) Anderson (1983) 邦訳 12 頁。
- (2) ナショナリズムをめぐる「タイポロジーの罫」について興味があれば、とりあえず Dahbour & Ishay (eds.) (1995), Hutchinson & Smith (eds.) (1994), 田口 (1996) などの文献を参照されたい。

ちなみにあのウェーバーですら、ナショナリズムについては次のように述べて当惑を隠せずにいる。「精密な概念構成をすれば消えてなくなる『種族的』共同社会の概念は、この意味において、ある程度まで『国民』の概念と同じである。『国民』についてはいずれ社会学的な把握を試みたいと思うが、このものこそは、持ち前の悲壮感によって、われわれにとって

いちばん厄介な概念なのである」(Weber [1911], 邦訳76頁, 下線は引用者)。

- (3) 引用文中の下線部は直後に「この文化的人造物が、これほどまでに深い愛着を人々に引き起こしてきたのはなぜか」(*ibid.*, 15頁)と言い換えられている。

【参考文献】

Anderson, Benedict (1983) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso (白石隆・白石さや訳『想像の共同体』リポート, 1987年)。

…… (1992) “The New World Disorder”, *New Left Review*, No.193. (関根政美訳「<遠隔地ナショナリズム>の出現」『世界』1993年9月号)。

…… (1994) “Exodus”, *Critical Inquiry*, No.20. (永山博之訳「エクソダス」『みすず』第401号, 1994年8月号)。

Dahbour, Omar & Micheline R.Ishay (eds.)(1995) *The Nationalism reader*, Humanities Press.

Hutchinson John & Anthony D.Smith (eds.)(1994) *Nationalism (Oxford Readers)*, Oxford U.P.

Weber, Max (1911) “Ethnische Gemeinschaftsbeziehungen” in ders., *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriß der verstehenden Soziologie*, Fünfte, revidierte Auflage, mit textkritischen Erläuterungen, herausgegeben von Johannes Winckelmann, Tübingen 1976 (中村貞二訳「種族的共同社会関係」『みすず』第211号, 1977年9-10月号)。

田口富久治 (1996) 『民族の政治学』法律文化社。